

日本文学全集
別巻2

現代詩歌集

光太郎・賢治・白秋・朔太郎・達治
晶子・啄木・茂吉・子規・虚子・他

河出書房

現代詩歌集



カラー版日本文学全集 別2

1967©

昭和四十二年八月二十日 初版印刷
昭和四十二年八月二十五日 初版発行

定価 七五〇円

編者 伊藤 信吉

発行者 河出 朋久

印刷者 草刈 親雄

装幀者 亀倉 雄策

本文印刷 中央精版印刷株式会社

口絵印刷 凸版印刷株式会社

製本 加藤製本株式会社

製函 加藤製函印刷株式会社

本文用紙 本州製紙株式会社

クロース 日本クロス工業株式会社

発行所 株式会社 河出書房

東京都千代田区神田小川町三丁目六番地
電話 東京(292)三七一一(大代表) 振替 東京一〇八〇二

落丁本・乱丁本はお取替えいたします

目次

現代詩歌集

§ 詩 §

高村光太郎		七
宮沢賢治		七
北原白秋		七
萩原朔太郎		八
三好達治		二二
山村暮鳥		二三
堀口大学		一四
立原道造		一五
伊東静雄		一七〇

西脇順三郎 一八三

中原中也 一九

村野四郎 三二

金子光晴 三三

小野十三郎 三四

草野心平 三五

§ 短歌 §

与謝野晶子 三六

石川啄木 三六

斎藤茂吉 三六

若山牧水 三二

釈 迢空 三二

吉井 勇 三三

正岡子規 三四

高浜虚子 三五

飯田蛇笏 三六

水原秋桜子 三七

編集覚書 三八

解説 三九

色刷口絵 近藤弘明

色刷挿面 岡鹿之助

北原白秋
西脇順三郎
高村光太郎
萩原朔太郎
三好達治
立原道造
金子光晴
石川啄木
若山牧水
斎藤茂吉
正岡子規

山口薫

伊藤廉

近藤弘明

山田申吾

森田沙伊

現代詩歌集

高村光太郎

「道程」

失はれたるモナ・リザ

モナ・リザは歩み去れり

かの不思議なる微笑に銀の如き顫音を加へて

「よき人になれかし」と

とほく、はかなく、かなしげに

また、凱旋の將軍の夫人が儼視の如き

冷かにしてあたたかなる

銀の如き顫音を加へて

しづやかに、つつましやかに

モナ・リザは歩み去れり

モナ・リザは歩み去れり

深く被はれたる煤色の仮漆こそ

はれやかに解かれたれ

明治十六年三月、東京市下谷区西町に生まる。東京美術学校卒。明治三十九年から三年半にわたってフランスその他に留学し、近代彫刻について学んだ。帰国と同時に旺盛な詩作をはじめ、「パンの会」のメンバーとなって一時期デカダンの生活をした。大正三年「道程」出版。その後、人生的、社会的詩風に入ったが、戦時中は多数の戦争詩を発表。終戦とともに岩手の山で七年間を過ごし、後に東京へ出たが昭和三十一年四月歿した。

ながく画堂の壁に閉ぢられたる

額ぶちこそは除かれたれ

敬虔の涙をたたへて

画布にむかひたる

迷ひふかき裏切者の画家こそはかなしけれ

ああ、画家こそはかなけれ

モナ・リザは歩み去れり

モナ・リザは歩み去れり

心弱く、痛ましけれど

手に権謀の力つよき

昼みれば淡緑に

夜みれば真紅なる

かのアレキサンドルの青玉の如き

モナ・リザは歩み去れり

モナ・リザは歩み去れり

我が魂を脅し

我が生の燃焼に油をそそぎし

モナ・リザの唇はなほ微笑せり

ねたましきかな

モナ・リザは涙をながさず

ただ東洋の真珠の如き

うるみある淡碧の齒をみせて微笑せり

額ぶちを離れたる

モナ・リザは歩み去れり

モナ・リザは歩み去れり

かつてその不可思議に心をのき

逃亡を企てし我なれど

ああ、あやしきかな

歩み去るその後かげの慕はしきよ

幻の如く、又阿片を燭く烟の如く

消えなば、いかに悲しからむ

ああ、記念すべき霜月の末の日よ

モナ・リザは歩み去れり

根付の国

頬骨が出て、唇が厚くて、眼が三角で、名人三五郎の彫つた根付
の様な顔をして

魂をぬかれた様にぼかんとして

自分を知らない、こせこせした

命のやすい

見栄坊な

小さく固まつて、納まり返つた

猿の様な、狐の様な、ももんがあの様な、だぼはぜの様な、
の様な、鬼瓦の様な、茶碗のかけらの様な日本人
麦魚

食後の酒

青白き瓦斯の光に輝きて

吾がベネヂクチンの静物画は

忘れられたる如く壁に懸れり

食器棚の鏡にはさまざまの酒の色と

さまざまの客の姿と

さまざまの食器とうつれり

流し来る月琴の調は

幼くしてしかも悲し

かすかに胡弓のひびきさへす

わが顔は熱し、吾が心は冷ゆ

辛き酒を再びわれにすすむる

マドモワゼル・ウメの瞳のふかさ

寂寥

赤き辞典に

葬列の歩調あり

火の気なき暖炉は

鉦山にひびく杜鵑の声に耳かたむけ

力士小野川の嗟嘆は

よごれたる絨毯の花模様にひそめり

何者か来り

窓のすり硝子に、ひたひたと

燐をそそぐ、ひたひたと――

黄昏はこの時赤きインキを過ち流せり

何処にか走らざるべからず
走るべき処なし

何事か為さざるべからず

為すべき事なし

坐するに堪へず

脅迫は大地に満てり

いつしか我は白のフランクネルに身を捲き
蒸風呂より出でたる困憊を心にいだいて
しきりに電磁学の原理を夢む

朱肉は塵埃に白けて

今日の仏滅の黒星を嗤ひ

晴雨計は今大擾乱を起しつつ

月は重量を失ひて海に浮べり

鶴香水は封筒に黙し

何処よりともなく、折檻に泣く

お酌の悲鳴きこゆ

ああ、走る可き道を教へよ

為すべき事を知らしめよ

氷河の底は火の如くに痛し

痛し、痛し

冬が来る

冬が来る

寒い、鋭い、強い、透明な冬が来る

ほら、又ろろんとひびいた

連発銃の音

泣いても泣いても張がある

つめたい夜明の霜のころ

不思議な生をつくづくと考へれば

ふと角兵衛が逆立ちをする

私達の愛を愛といつてしまふのは止さう

も少し修道的で、も少し自由だ

冬が来る、冬が来る

魂をとどろかして、あの強い、鋭い、力の権化の冬が来る

冬が来た

きっぱりと冬が来た

八つ手の白い花も消え

公孫樹の木も筭になつた

きりきりともみ込むやうな冬が来た

人にいやがられる冬

草木に背かれ、虫類に逃げられる冬が来た

冬よ

僕に來い、僕に來い

僕は冬の力、冬は僕の餌食だ

しみ透れ、つきぬけ

火事を出せ、雪で埋めろ

刃物のやうな冬が来た

道程

僕の前に道はない

僕の後ろに道は出来る

ああ、自然よ

父よ

僕を一人立ちにさせた広大な父よ

僕から目を離さないで守る事をせよ

常に父の気魄を僕に充たせよ

この遠い道程のため

この遠い道程のため

秋の祈

秋は唳唳と空に鳴り

空は水色、鳥が飛び

魂いなき

清浄の水ここに流れ

こころ眼をあけ

童子となる

多端紛雜の過去は眼の前に横はり

血脈をわれに送る

秋の日を浴びてわれは静かにありとある此を見る

地中の営みをみづから祝福し

わが一生の道程を胸せまつて思ひながめ

奮然としている

いのる言葉を知らず

涙いでて

光にうたれ

木の葉の散りしくを見

獣の唳唳として奔るを見

飛ぶ雲と風に吹かれる庭前の草とを見

かくの如き因果歴々の律を見て

こころは強い恩愛を感じ

又止みがたい責を思ひ

堪へがたく

よろこびとさびしさとおそろしさに跪く

いのる言葉を知らず

ただわれは空を仰いでいのる
空は水色
秋は唳唳と空に鳴る

「道程」以後

小娘

たぶん工場通いの小娘だらう
鼻のしやくれた愛嬌のある顔に
まつ毛の長い大きな眼を見ひらいて
夕方の静かな町を帰つてゆく
つつましげに

しかし何処かをちつと見て
群を離れた鳥のやうに
まつすぐに歩いてゆく
気がついてみると少しびつこだ
其がとんとわからないのは
娘の歩き方のうまさ故だ
かすかに肩がゆれて
小さな包を抱へた肘が上る
銀杏返の小娘は光つた眼をして
ひきしまつた口をして
こざつぱりしたなりをして
愛嬌のあるふざけたさうな小娘は
しかし何処かをちつと見て

緑のしつとり暮れる町の奥へ帰つてゆく
私は微妙な愛着の燃えて来るのを
何もかも小娘にやつてしまひたい氣のして来るのを
やさしい祈の心にかへて
しづかに往来を掃いてゐた

雨にうたるるカテドラル

おう又吹きつのるあめかぜ。
外套の襟を立てて横しぶきのこの雨にぬれながら、
あなたを見上げてゐるのはわたくしです。
毎日一度はきつとここへ来るわたくしです。
あの日本人です。
けさ、

夜明方から急にあれ出した恐ろしい嵐が、
今巴里の果から果を吹きまくつてゐます。

わたくしにはまだこの土地の方角が分かりません。

イイルド フランスに荒れ狂つてゐるこの嵐の顔がどちらを向
いてゐるかさへ知りません。

ただわたくしは今日も此処に立つて、

ノオトルダム ド バリのカテドラル、

あなたを見上げたばかりにぬれて来ました、

あなたにさはりたいばかりに、

あなたの石のはだに人しれず接吻したいばかりに。

おう又吹きつのるあめかぜ。

もう朝のカフェの時刻なのに

さつきボンヌウフから見れば、

セエヌ河の船は皆小猯のやうに河べりに繋かれたままです。
秋の色にかがやく河岸の並木のやさしいプラタンの葉は、

鷹に追はれた頬白の群のやう、

きらきらばらばら飛びまよつてゐます。

あなたのうしろのマロニエは、

ひろげた枝のあたまをもまれるたびに
むく鳥いろの葉を空に舞ひ上げます。

逆に吹きおろす雨のしぶきでそれがまた

矢のやうに広場の敷石につきあたつて砕けます。

広場はいちめん、模様のやうに

流れる銀の水と金茶焦茶の木の葉の小島とで一ぱいです。

そして毛あなにひびく土砂降の音です。

何かの吼える音きしむ音です。

人間が声をひそめると

巴里中の人間以外のものが一齐に声を合せて叫び出しました。

外套に金いろのプラタンの葉を浴びながら

わたくしはその中に立ってゐます。

嵐はわたくしの国日本でもこのやうです。

ただ聳え立つあなたの姿を見ないだけです。

おうノオトルダム、ノオトルダム、

岩のやうな山のやうな鷺のやうなうづくまる獅子のやうなカテド

ラル、

瀬気の中の暗礁、

巴里の角柱、

目つぶしの雨のつぶてに密封され、

平手打の風の息吹をまともになうけて、

おう眼の前に聳え立つノオトルダム ド パリ、

あなたを見上げてゐるのはわたくしです。
あの日本人です。

わたくしの心は今あなたを見て身ぶるひします。

あなたのこの悲壯劇に似た姿を目にして、

はるか遠くの国から来たわかももの胸はいっぱいです。

何の故かまるで知らず心の高鳴りは

空中の叫喚に声を合せてただをのくばかりに響きます。

おう又吹きつゝのるあめかぜ。

出来ることならあなたの存在を吹き消して

もとの虚空に返さうとするかのやうなこの天然四元のたけりやう。

けぶつて燐光を発する雨の乱立。

あなたのいただきを斑らにかすめて飛ぶ雲の鱗。

鐘樓の柱一本でもへし折らうと執念くからみつゝ旋風のあふり。

薔薇窓のダンテルにぶつけ、はじけ、ながれ、羽ばたく無数の小

さな光つたエルフ。

しぶきの間に見えかくれるあの高い建築べりのガルグイユのだけ

ものだけが、

飛びかはすエルフの群を引きうけて、

前足を上げ首をのぼし、

歯をむき出して燃える噴水の息をふきかけてゐます。

不思議な石の聖徒の幾列は異様な手つきをして互にうなづき、

横手の巨大な支壁はいつもながらの二の腕を見せてゐます。

その斜めに弧線をあかく幾本かの腕に

おう何といふあめかぜの集中。

ミサの日のオルグのとどろきを其処に聞きます。

あのほそく高い尖塔のさきの鶏はどうしてゐるでせう。

はためく水の幔まくが今は四方を張りつめました。

その中にあなたは立つ。

おう又吹きつのるあめかぜ。

その中で

八世紀間の重みにつしりと立つカテドラル、
昔の信ある人人の手で一つつつ積まれ刻まれた幾億の石のかたま
り。

真理と誠実との永遠への大足場。

あなたはただ黙つて立つ、

吹きあてる嵐の力をちつと受けて立つ。

あなたは天然の力の強さを知つてゐる、

しかも大地のゆるがぬ限りあめかぜの跳梁に身をまかせる心の落
着を持つてゐる。

おう錆びた、雨にかがやく灰いろと鉄いろの石のはだ、

それにさはるわたくしの手は

まるでエスメラルダの白い手の甲にふれたかのやう。

そのエスメラルダにつながる怪物

嵐をよるこぶせむしのクワジモトがそこらのくりかたの蔭に潜ん
でゐます。

あの醜いむくろに盛られた正義の魂、

堅靱な力、

傷つくる者、打つ者、非を行はうとする者、蔑視する者

ましてけちな人の口の端を黙つて背にうけ

おのれを微塵にして神につかへる、

おうあの怪物をあなたこそ生んだのです。

せむしでない、奇怪でない、もつと明るいもつと日常のクワジモ
トが、

あなたの莊嚴なしかも掩ひかばふ母の愛に満ちたやさしい胸に育
つて、

あなたを育て、

あれからどのくらゐ生れた事でせう。

おう雨にうたるカテドラル。
息をついて吹きつのるあめかぜの急調に
俄然とおろした一瞬の指揮棒、
天空のすべての楽器は混乱して
今そのまはりに旋回する乱舞曲。
おうかかる時黙り返つて聳え立つカテドラル、
嵐になやむ巴里の家をちつと見守るカテドラル、
今此処で、
あなたの角石に両手をあてて熱い頬を
あなたのほだにびつたり寄せかけてゐる者をぶしつけとお思ひ下
さいますな、
酔へる者なるわたくしです。
あの日本人です。

下駄

地面と敷居と塩せんべいの箱とだけがみえる。
せまい往来でとまつた電車の窓からみると、
何といふみそほらしい汚ならしいせんべ屋だが、
その敷居の前に脱ぎすてた下駄が三足。
その中に赤い鼻緒の
買ひ立ての小さい豆下駄が一足
きちんと大事相に揃へてある。
それへ冬の朝日が暖かさうにあたつてゐる。

落葉を浴びて立つ

どこかで伽羅ガラのくゆつてゐるやうな日本の秋の
なまめかしくも清浄な一天晴れたお日和さまよ。

鳥かげさへ縦横にあたたかい十一月の消息をちらつかせ、
思ひがけない大きなドンといつしよに、

一斉に叫をあげる遠い田舎の工場の汽笛が
ひとしきり

空に無邪気な喜の輪を急がいてゐる。

そんな時です、私が

無用の者入るべからずの立札に止まつてゐる赤蜻蛉に挨拶しながら、

三千坪の廃園の桜林にもぐり込んで、
黙つて落葉を浴びて立つのは。

ああ、有り余る事のよさよ、ありがたさよ、尊さよ、

この天然の無駄づかひのうれしさよ、

ざくざくと積もつて落ち散る錆びた桜のみみぢ葉よ。

惜しげもない粗相らしいお前の姿にせめて私を酔はせてくれ、

勿体らしい、いちいちした世界には住みきれない私である、

せめてお前に身をまかせて、

くゆり立つ秋の日向ぼつこに、

世にもぶちまけた、投げ出した、有り放題な、ふんだんの美に

身も魂もねむくなるまで浸させてくれ。

手ざはり荒い無器用な太い幹が、

いつの間にかすんなり腕をのばして、

俵屋好みのゆるい曲線に千万の枝を咲かせ、
微妙な網を天上にかけ渡す

桜林の昼のテムポは、

うらうらとして移るともないが、

暗く又あかるい梢から絶間もなく、

小さな手を離しては、

ばらばらと落ち来る金の葉や瑪瑙の葉。

どんな狸毛でかいた密画の葉も、

天然の心ゆたかな無雑作さに、

散るよ、落ちるよ、雨と降るよ、

林いちめん、

ざくざくとつもるよ。

その中を私は林の魍魎ちうりやうとなり、魍魎まうりやうとなり、

浅瀬をわたる心にさざなみ立てて歩きまはり、

若木をゆさぶり、ながながとねそべり、

又立つて老木のぬくもりある肌に寄りかかる。

——棄ててかへり見ぬはよきかな、

あふれてとどめあへぬはよろしきかな、

程を破りて流れ満つるはたふときかな、

さあらぬ陰に埋もれて天然の素中に入るはたのしきかな——

落葉よ、落葉よ、落葉よ、

私の心に時じくも降りつもる数かぎりない金いろの落葉よ、

散れよ、落ちよ、雨と降れよ、

魂の森林にあつく敷かれ、

ふくよかに積みくさり、

やがてしつとりやはらかい腐葉土となつて私の心をあたためく
れ。